

若者はどのように文学に感動するか(II)—文学的感動が 日本人大学生に与える影響についての探索的研究

How Are Young People Moved by Literature? (II)—An Exploratory Study on the
Influences of Being Moved by Literary Works on Japanese University Students

野中 進*、趙 丹寧**

Susumu NONAKA, Danning ZHAO

文学を読む体験は読者の自己反省 (Kuiken et al., 2004) や変容 (Miall et al., 2002) を引き起こし、向社会的行動を動機づける (Koopman et al., 2015) などの影響を持つことが示されてきた。一方、実生活での感動体験は、自己の受容・向上意識、他者への接近・援助的な態度、価値観体系の更新 (e.g. 戸梶, 2004 ; Zickfeld et al., 2018) などの影響を持つことも示されてきた。

それでは、文学に感動するときに人はどのような影響を受けるだろうか。本稿では、文学的感動の特徴と喚起要因を検討した前稿を踏まえ、文学的感動が読者に与える影響を検討した。41名の日本人大学生を対象に調査し、彼らがこれまで最も深く感動した文学作品を読んだ直後に起きた変化、現在まで続く変化、作品を振り返って感じたことについて自由記述を求めた。その結果、感動直後の影響は自己向上意識、文学への関心、日常のありがたさなどに関するものであった。次に、持続的な影響は成長・前向きさ、文学への関心、価値観の多様性、周囲への愛などに関するものであった。最後に、想起時の効用は自己理解、文学への関心、懐かしさ、世界や他者への関心などに関するものであった。

本研究の結果、文学的感動は実生活の感動と同様、直後に影響を及ぼすだけでなく、その後も影響を及ぼし続けることが示された。文学的感動の持続的影響には、自己向上・成長、価値観の多様性と他者への関心・愛など実生活の感動と共通するものがある。他方、日常のありがたさの認識や死への関心といった独自のものもある。さらに文学的感動を想起することには、自身の成長を振り返る動機づけ、読書の意義の再確認などの意義があることも明らかになった。

キーワード：文学、感動の影響、日本人、大学生、経験的アプローチ

* のなか・すすむ 埼玉大学 教養学部教授、ロシア文学、文学理論

** ちょう・たんねい 埼玉大学 国際本部 留学相談員、カウンセリング心理学、感情心理学、文化心理学

1. はじめに

本稿では、前稿（野中&趙, 2023）の結果を踏まえ、文学的感動が読者に与える影響について、経験的アプローチに基づいた分析と考察を行う。

前稿では日本人大学生を対象にアンケート調査を行い、彼らが文学作品に感動したときどのような反応を示すか、作品のどのような要素（主題面、表現面）にとくに感動するかを調査し、併せてどのような読書習慣を持つかを調べた。前稿で明らかになったのは以下の点である：1) 文学による感動（以下「文学的感動」）が引き起こす反応としては、胸の熱さ、喉の詰まり、涙といった実生活の感動時と同様の反応が多く挙げられる一方、心のざわつき、不眠、溜息といったネガティブな反応も認められたこと。これは実生活の感動に比べて文学による感動がネガティブな要素をより多く含むうる可能性を示しており、いくつかの先行研究と合致する。2) 作品のどのような要素にとくに感動するのかについては、「愛情」や「日常の脆弱さ」「不幸な境遇でも幸せになれること」などの主題が感動を喚起しやすいこと、その一方で「新鮮味」（異化）や「複数の価値観のぶつかり合い」（対話性）などの表現手法が感動体験と結びつくことが示された。さらに、家族愛という「身近な主題」と謎や伏線などを用いた「ミステリー的構成」の組合せが文学的感動を引き起こしやすい傾向が示された。この組合せは読者の「自分自身に引き付けた読み」を誘い、感動を喚起しやすくすると推測される。3) 読書習慣と文学的感動については、文学作品を読む頻度の高さが必ずしも文学的感動の条件ではないことが明らかになった。言いかえれば、読書習慣が確立していない（ないし中断している）大学生でも文学的感動は生じることが示された。以上が前稿の調査結果の概略である。

本稿ではこれらの知見を踏まえ、文学的感動が読者にどのような影響を与えるかについて分析と考察を行う。

1.1 文学が読者に与える影響

文学が読者にどのような影響を与えるかという問いは、経験的アプローチに基づく近年の文学研究では重要である。Don Kuiken と David Miall を中心とするカナダのアルバータ大学の研究チームは実証的な読書研究で多くの成果を上げている。読者は文学作品を読む際、登場人物を自分と同一視（identification）しがちであること、自己反省（self-implication）を行うこと（Kuiken, Miall, & Sikora, 2004）、読書は読者の自己変容を促すこと（Miall & Kuiken, 2002）などが示されてきた。Olivia Fialho らは「変革的読書（transformative reading）」のコンセプトを掲げ、文学作品を読むことが読者の言語運用能力、人格形成、成熟、対人関係の向上などに関与しうることを実験で示した（Fialho, 2019；Zyngier & Fialho 2010；Fialho, Zyngier, & Miall, 2011）。その際、従来の受け身的な文学授業でなく、作品についての討論や作文などを積極的に取り入れた文学教育の重要性も強調される。

Maja Djikic らも文学体験が持つ変革的（transformative）な効果について次のような実験を行った（Djikic et al., 2009）。大学生の参加者たちをアントン・チャーホフの短編『犬を連れて奥さん』

を読む実験群とその内容（男女の不倫）を裁判記録風書き直したものを読む統制群に分け、作品の芸術性と面白さに対する評価、および読む前後の人格特性と感情の強度を測定し、二つの群を比較した。その結果、チャーホフの原作を読んだ実験群は統制群と比べ、ストーリー内容の面白さの評価は同レベルだったのに対し、芸術性の評価は高かった。また、実験群では統制群より感情の変化が大きく、人格特性の全体にも変化が生じた。この実験結果は、文学作品の表現面（文体、構成、技法など）が読者への影響にすぐれて関与的であることを示している。文学の主題面（内容、意味）と表現面（手法、形式）の統一は文学研究の中心的問いであり、意義深い実験と言えよう。

その関連で注目したいのは Eva Maria Koopman らの議論である（Koopman & Hakemulder, 2015）。彼女らによれば、文学作品の読者への主たる影響は共感（empathy）と内省（self-reflection）である。その上で、共感は物語性（narrativity）により深く関わるのに対し、内省は前景化（foregrounding）ないし異化（defamiliarization）によって引き起こされるとする。文学体験が読者の共感を引き起こし、内省を深化させることで、読者は「向社会的行動（prosocial behavior）」の動機付けを高めるといふ。この主張を実験によって検証しようとする点において Koopman らの研究は経験的アプローチに位置づけられる。その一方、Koopman らがヤン・ムカジョフスキーの前景化、ヴィクトル・シクロフスキーの異化概念に拠っている点で、理論的アプローチとの接続が見られる。実際、経験的アプローチの読書研究では早い段階から「前景化」と「異化」が注目されてきた（Miall & Kuiken, 1994）。読者への影響を考える上で文学作品の表現面への注目が欠かせないという認識はきわめて重要である。

その意味で、いくつかの文学理論の概念に着目する必要がある。前稿でも述べたように、我々は「異化」（Shklovsky, 1990）と「対話性」（Bakhtin, 1981）を重視している。前稿の調査では参加者の理解しやすさのために「異化」という用語を「新鮮味」と「違和感」という言葉に置き換えた。その結果、「新鮮味」を感動の喚起要因として挙げた回答は 17 例で全体の 63.0% を占めたが、「違和感」を挙げた回答は 1 例のみで 3.7% だった。つまり、文学表現が与える「新鮮味」は感動と結びつきやすいのに対して「違和感」はそうでないという結果が得られた。これに関する一つの仮説として「ソフトな異化」（⇒表現の新鮮さ）と「ハードな異化」（⇒表現の違和感）に分け、読者にとっては前者の方が受け入れやすいという可能性が考えられる。もちろん、異化のソフトさとハードさは程度問題であり、読者によって受け止め方も異なるだろう。だが「自分の言語規範・文体感覚にとって新鮮に感じられる程度の新奇な表現」が感動を引き起こしやすいのに対し「自分の言語規範・文体感覚を揺るがすような新奇的表現」は感動喚起を妨げがちである、という仮説には一定の妥当性が認められるので、今後の研究課題としたい。

文学が読者に与える影響との関連について言えば、表現の新鮮さへの着目は読者の言語規範・文体感覚の多様化を促すという意味で、異化効果による影響と言えるだろう。実際、文学作品を読むことが言語・文体感覚の向上に役立つということは従来信じられていることである。

他方、ミハイル・バフチンが提唱した「対話」(Bakhtin, 1981 ; Bakhtin, 1984) について言えば、前稿の調査では「複数の価値観のぶつかり合い」という言い換えを用いた。この項目を選んだ回答は6例で全体の22.2%であり、「新鮮味」に次ぐ回答数であった。ここで指摘したいのは「複数の価値観のぶつかり合い」という特徴が作品の表現面だけでなく主題面にも関わることである。作品内に複数の価値観が提示され、それらが必ずしも一つの答えに収斂しない構成原理はポリフォニー(多声性)と名づけられ、バフチンの対話哲学の中心的概念である。文学作品の表現と主題の結びつきを説明するためのモデルとしてしばしば用いられる。このようにして「対話」は読者の価値観の多様化や他者/世界への関心を促すことが予想される。

以上のように、文学研究では経験的アプローチでも理論的アプローチでも、文学が読者に与える影響として、自己の理解と成長、他者/世界への理解と共感といった研究の蓄積があり、本研究もそれらを参考にしている。

1.2 文学的感動が読者に与える影響

前述した Djikic らの研究 (Djikic et al., 2009) では、もう一つ重要な論点が提起された。文学の受容における感情の役割である。読書時に湧き上がる強い感情が読者の人格変容を引き起こすという結果は、我々の研究にも重要な示唆を与える。読者が文学作品を読む際に、感動という強い感情を経験したならば、人格や意識、行動などに大きな変容が起きる可能性があると考えられる。

そもそも心理学の研究では、感動には様々な効果があることが示されてきた。実験研究により、人が感動直後に起きる変化が示されてきた。アメリカ人を対象とした実験では、人生の感動体験を想起した実験群は、喜びを想起した統制群より多く UNICEF への募金に応じた (Cova & Deonna, 2014)。日本を含む19カ国での実験では、参加者たちにビデオクリップの鑑賞、ないし自分自身の過去のエピソードの記述を行わせた。その結果、感動を体験した実験群は、感動を体験しなかった統制群より、援助意識と他者とのつながり意識が高まった (Zickfeld et al., 2018)。ドイツ人を対象とした実験では、感動的なビデオクリップを見た実験群は、コメディを見た統制群より、社会の人達を助けたい、または家族や友人など身近な人ともっと一緒にいたいという他者への援助・接近意識が高まった。また、人生で何かを達成したいという自己向上の動機づけも高まった (Landmann et al., 2019)。これらの研究によって、人は感動した直後に身近な人や社会の人達への接近・援助意識が高まるとともに、自己向上意識も高まることが明らかになった。

一方、感動による影響の時間的長さについては、人が感動してから数か月から数年経った後でも、感動による変化があることが示されている。戸梶 (2004) は、自分の何かを変えた感動体験について、日本人大学生に質問紙調査を行い、感動の効果には人間愛・関係改善といった他者志向・受容、やる気・肯定的思考・自己効力感といった自己向上の動機づけ、思考転換・視野拡大といった認知的枠組みの更新があることを示した。感動は自己効力感と自己肯定意識を高め (佐伯・新名・服部・三浦, 2006)、特性的自己効力感を高めた (畑下・瀬

戸, 2012)。感動を頻繁に経験する人は、対人関係満足度と自他共存意識や達成動機が高く (楠本・長ヶ原, 2004)、感動体験の累積は人生の目的、人格的成長、積極的な人間関係などの心理的な wellbeing (幸福感) を促進する (澤口, 2012) などの効果が示されてきた。趙・藤 (2019) は、日本人と中国人大学生に対し、人生で最も深い感動体験がもたらした持続的な変化についてアンケート調査を行った結果、日中共通で「自己の受容・向上と希望の形成」、「身近な人への接近的・援助的態度の形成」、「利他的・博愛的意識の高まり」と「人生の統制不能感の深まり」の 4 因子が見られ、ほぼ全ての因子が主観的幸福感と人生に対する満足感に正の相関を示した。

以上のように、感動は直後に人に一時的な変化をもたらすだけでなく、持続的な変化ももたらすことが示されてきた。それはなぜだろうか。

戸梶 (2004) は、感動体験に関する記憶が保存されているうちに精緻化し、様々な効果 (変化) を持続させ、その後に個人の問題意識に関連する目標行動を開始させる可能性を指摘した。記憶の一つに、自伝的記憶 (autobiographical memory) というものがある。自伝的記憶とは、日常生活で経験した本人にとって意味のある出来事に関する記憶であり (神谷, 2002)、自己と深く関わることが特徴である (Brewer, 1986)。自伝的記憶は動機づけや態度形成などの方向づけ (directive) 機能を持ち、その機能は現在の問題解決や将来の計画策定に役立ち、やる気などを動機づけ様々な人生態度の形成に関わる (Pillemer, 2003; 佐藤, 2008)。自伝的記憶の一種である感動体験も、感動の直後だけでなく、より長い期間、影響を及ぼすと考えられる。佐々木・皆川 (2013) と速水・陳 (1993) も感動体験を自伝的記憶として捉えている。

趙 (2021) は、感動体験が自伝的記憶であることに着目し、日本と中国人それぞれ 20 名に対するインタビュー調査に基づき、感動体験が起きてから現在までの間、自分の考え方や振舞い方において生じた変化を分析した。日本人と中国人ともに、自己肯定・向上意識、利他意識、自他への理解が高まる一方、人生のコントロール不能感が高まるといった変化も認められた。それらの変化を自伝的記憶の方向づけ機能と比較したところ、両者の類似性が確認された。つまり、人生の深い感動体験は自伝的記憶として長く保持され、持続的に人に影響を及ぼし続けると考えられる。

以上の知見に基づいて、文学を読んで深く感動した過去の体験も、その人の後の人生に影響を及ぼし続ける可能性が考えられる。

1.3 研究目的

以上の議論を踏まえ、本論は以下のことを研究目的とする。前稿と同じく日本人大学生を対象とし、文学作品に深く感動した体験は彼らにどのような影響を及ぼしたかを調べる。

2 調査方法

2.1 手続きと調査対象

2022 年 7 月および 2023 年 10 月の二回にわたり、関東にある国立大学で調査を行った。本調査は、埼玉大学の倫理審査委員会の承認を得て実施された (承認番号 R4-E-3)。

著者は事前に受講生に研究概要・目的・所要時間の目安、および参加しないことで不利益が生じないことを伝え、参加者の承諾を得た上で、ワークシートを記入してもらった。

41名の参加者から回答を得、有効回答は41名であった。内訳として、男子学生17名、女子学生23名、性別不明1名であった。参加者の平均年齢は19.5歳であり、標準偏差は1.62であった。

2.2 ワークシートの構成

ワークシートの構成は以下の通りである。

作品の情報 作品の題名と作者の名前を尋ねた。

文学的感動がもたらした影響 読者がこれまで最も深く感動した文学作品について、以下の項目の自由記述を求めた——作品を読んで直後に起きた自分の変化（直後の影響）、作品が現在までもたらす影響（持続的な影響）、作品を振り返る時に思ったこと（想起時の効用）。

個人属性 年齢、性別を尋ねた。

3. 結果と考察

調査結果は、「3.1 文学の感動による直後の影響」「3.2 文学的感動による持続的影響」「3.3 かつての文学的感動をふり返ることの効用」に分けて、述べていきたい。

自由記述の内容については、著者1と著者2の合議により分類を行った。その後、分類について大学院生1名が独自に確認し、相違がある場合には著者2と再度合議を行い、最終的な分類を確定した。

3.1 文学の感動による直後の影響

「その作品を読んで感動した後に、あなたにどんな変化が起きましたか」に対してはさまざまな回答があった。全体的に回答分量が多く、かつ自由に語っている。自分自身の変化とつなげると、作品について語るべきことが得やすいようである。Table 1で結果を表す。

Table 1 文学的感動の直後の影響

カテゴリー	度数	%
向上心が湧き、前向きになった	12	29.3
文学への関心が向上した	8	19.5
日常のありがたさを認識した	8	19.5
価値観が多様になった	4	9.8
周囲への愛が増えた	4	9.8
死へ関心をもつようになった	2	4.9
日常生活で感動しやすくなった	2	4.9
自分の失敗をより意識するようになった	1	2.4
総数	41	100.0

まず、「向上心が湧き・前向きになった」に関する回答が最も多かった（12件）。「何かに打ちこむ人はとても素敵だと思い、何事にも一生懸命やろうと少しの期間だけが様々打ちこん

だ」(『チア男子!』) ; 「私は何かに挑戦する前から、失敗したときのこと、うまくいかなかったときのことを先に考えてしまうクセがあり、後悔することを嫌っていた。でも、やっぱり未来のことは誰にも分からないので、最初から決めつけるのではなく、失敗しても「またやってみよう」と堂々と言える自分になりたいと思うようになった」(『怠けているのではなく、充電中です』)。努力や挑戦の意義を再認識したという回答は、読書の教育的意義を支持するものとなる。

次に、「文学への関心」に関する回答が 8 件あった。そのなかで、小説に限らず、漫画やアニメ、楽曲の歌詞などに感動しやすくなったという回答(3 件)が特徴的である。「本を読んでより主人公に共感し、感動できるようになった」など、感動体験によって文学や隣接ジャンルに感動しやすくなったことの自覚が認められる。また「一般向けの小説も読むようになった」という回答も 1 件あった。

「日常のありがたさを認識した」という回答が多い(8件)ことは注目すべきである。「ありきたりですが、幸せな今をあたり前と思わず、大切に生きていこうと思いました」(『桜のような僕の恋人』) ; 「今までは何気なく毎日を過ごしていたが、その作品を読んだことで、一日一日を悔いなく生きていこうと思うようになった」(『余命10年』)。非日常的なプロットが人気が高い傾向については前稿で述べたが、今回の調査では、そうした作品による感動を通じて逆に日常生活の価値を再認識したという回答が目立った。

「価値観が多様になった」という回答も 4 件あった。「色々な生き方があってよいのだと思えるようになった」(『コンビニ人間』)のような一般的感想がある一方、「日本にいると人種問題についてあまり気になることはないけれど、自分も当事者であることや、他国では自分より小さな子が問題意識を持っていることに気づき、常に何かを言ったりする時には相手の気持ちになって言うようになった」(『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』)のように、価値観の多様性についてより具体的に述べた回答もある。

これに関連して「周囲への愛が増えた」といった周囲の人々との関係について考えたという回答も 4 件ある。今回の調査で唯一、詩集を挙げた回答者は「1 人でいると寂しいと感じるようになった」(『サラダ記念日』)と答えた。「非現実的な部分もあるので、現実の世界で考えるのは難しかった。でも学校に行けない子がいるという現実を知り、その子たちが考えていることを実感した。そういう子たちが大きくなって先生と生徒として出会うことに感動し、実際にそうした場をつくることのできるのではないかと考えた」(『かがみの孤城』)という回答には虚構と現実の交差が認められる。この種の交差は文学的感動に伴う感想として自然なものと言える。

「死への関心」に自覚的になったという回答も少ないが(2 件)ある。「家族又は愛する者の死」という概念に敏感になり、小説だけでなくマンガやアニメやドラマなどでもそういった展開になると必ず涙が出るようになった」(『100 万回生きたねこ』)という回答に見られるように、特定の主題へのこだわりが形成されることは文学的感動の一つの影響と考えられる。とくにこの場合、幼い時期に死の主題に強い影響を受けることは一般に認められる傾向であり、児

童文学はこの点で重要な役割を果たすのかもしれない。

全体として、文学的感動による自分自身の変化について積極的に回答する傾向が目立ち、かつ肯定的な変化に関する回答が多い。文学的感動を伴う場合、作品世界と実生活をつなげることに多くの回答者が困難を感じず、むしろ積極的にそれを行おうとする傾向が認められる。これは文学的感動の影響として重要な点であると思われる。

3.2 文学的感動による持続的影響

「それらの変化は、いまのあなたに影響を及ぼしていますか。あれば、どんな影響ですか」という問いは、文学的感動の長期的・持続的な影響を問うたものである。前問同様、回答は質量ともに豊かで、回答者たちにとって答えやすい、また答え甲斐のある設問であることがうかがえる。Table 2 で結果を表す。

Table 2 文学的感動の持続的な影響

カテゴリー	度数	%
成長し前向きになった	8	23.5
文学への関心が向上した	6	17.6
価値観が多様になった	5	14.7
周囲への愛が増えた	4	11.8
日常のありがたさを認識した	4	11.8
死へ関心をもつようになった	3	8.8
ネガティブになった	2	5.9
日常生活で感動しやすくなった	1	2.9
その他	1	2.9
総数	34	100.0

「成長し前向きになった」ことを持続的影響として挙げた回答が最も多い（8件）。「物事を前向きに考えるようになった。例え、自分の思い通りにならなくても、その出来事から何かを学びとろうとするようにもなった」（『夢をかなえるゾウ』）；「自分の欲望に前より忠実になってより高い目標を定めるようになりました。また、自分がどんな人に見えるかということにより気を配るようになりました。人に合わせて自分が変化するというのを肯定的にとらえられるようになりました。矛盾しているようですが、あくまでも自分の目標の為に相手によって自分を変化させるということです」（『白夜行』）。後者の回答のふり返りは、自己分析としてかなり深いレベルに達していると言えよう。その理由としては、選んだ作品が「思春期もの」ではないこと、また読んだ時期が「高3の夏」とかなり最近で、かつ自意識の発達期であるため、より内省的なふり返りが可能だったと考えられる。

「文学への関心」に関する回答は6件ある。「柚木麻子先生の本を読み続けており、今も変わらず一番好きな作家さんになっている」（『本屋さんのダイアナ』）；「まず設定や細かいところを考えず読み通し（面白い作品はそれでも伝わってくる）、それからじっくりと細かい所を読むようになった」（『虐殺器官』）。文学以外の芸術ジャンルとの関連についての回答もあった：「文学作品だけではなく、音楽や映画の好みにも影響が及んだと思う」（『銀河鉄道の夜』）。全体の回答

数から見れば1割弱でしかないが、文学的感動によって文学への関心が強められた回答例として貴重である。

「価値観が多様になった」という回答については、読書直後の変化を尋ねた前問よりわずかに増えた(4件→5件)。「ひとつの見方としてさまざまな考え方があることが意識でき、それぞれの立場や他者について考慮したり、思いを巡らすことがより多くなったように感じる」(『氷菓』); 「これは将来いるかいないか」という価値判断ではなく、とりあえず経験しよう、忘れないようにしようと考えられるようになった。変化はもちろん、変化していないことも考えられるようになった」(『密やかな結晶』)。自己が複数の価値観に開かれ、かつそれらと対話的關係に入れているという自己評価、またそうした成長が文学的感動によって得られたというふり返りが示されている。文学的感動の持続的影響として「価値観の多様化」はとくに注目すべきものであり、今後の調査にも有効だろう。

「周囲への愛が増えた」といった周囲の人々との関係については4件の回答があるが、内容にはある種の多方向性が認められる。「放課後に学校に残るようになったり、休日に自分から友達を遊びに誘うようになった」(『サラダ記念日』); 「世界で起こっている諸問題について、人事ではないと考えるようになり、ニュースなどにより目を向けるようになった」(『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』); 「読んでから数年経った今でも臓器提供したいと強く思ったことを覚えている」(『人魚の眠る家』)。これら3つの回答は他者との積極的な関係性を示しているが、他方、「極力争いを避けるようになった」(『永遠の0』)のようにある種の消極性を示す回答もあった。他者との関係性は思春期から青年期にかけてもっとも重要で複雑な課題であり、文学的感動の影響にもその複雑さが現れているようである。

読書当時の変化を問うた前問では特徴的だった「日常のありがたさ」だが、持続的影響を問う本問では減少している(8件→4件)。「自らや、周りの人達が、ここに当たり前共に生きていることの尊さを知った。何より、人とのつながりの大切さと、美しさと、儚さを日々感じて生きるようになった」(『スイッチを押すとき』); 「今になってもまた現代の生活を感謝する」(『豊乳肥臀』)。一般論として言えば、平穏な日常のありがたさは実感し続けることが難しいものであり、持続的影響としては残りにくいかもしれない。

「死への関心」についても前問同様、少数だが(3件)回答がある: 「小さな虫でも自分の手で積極的に殺せなくなった。たとえば蚊や家にくもが出ても、できるだけ逃がすようになった」(『よだかの星』); 「死というワードにかなり敏感になった気がする。家族に迷惑をかけずに死にたいと思う」(『100万回生きたねこ』)。この二つの回答で特徴的なのは、挙げられた作品が児童文学であること、また読んだ時期がかなり早い(小学1年と3年)ことである。幼いころの感動体験によって死について強い関心を持つことや、パーソナリティ形成にも影響を与えうことはよく知られている。死の主題に関する児童文学の影響は興味深い問題であり、今後の研究課題としたい。

全体として言えば、文学的感動の持続的影響は、読書直後の変化とおおよそ同じ回答カテゴリー分布を示した。「成長・前向きさ」「文学への関心」「価値観の多様性」の3カテゴリーの回答が

数的にも（回答全体の5割強）、個々の回答の長さや内容の豊かさでも目立っている。若い読者にとってもっとも関心のあることの一つに「自分の成長」があるが、上の3カテゴリーはそれとの関係が強い。そのため、文学的感動の持続的影響として自信をもって挙げやすいカテゴリーなのだろう。それに較べると、「周囲の人々との関係」「日常のありがたさ」「死への関心」は具体性や持続性、深刻さなどの点でより困難なカテゴリーなのかもしれない。また、読書習慣が高校時代に中断したという回答者が多いため、これらのカテゴリーについての文学経験の影響が弱いという説明も可能だろう。

3.3 かつての文学的感動をふり返ることの効用

「過去の感動的な作品と当時の自分をふり返って、あなたはどんなことを思いましたか」という最後の問いは、かつての文学的感動をふり返ることそれ自体の意義を問うている。この問いでも、前述の二問と同様、質・量的に積極的な回答が多かった。Table 3 で結果を表す。

Table 3 文学的感動を振り返ることの効用

カテゴリー	サブカテゴリー	度数	%
自己理解が促進された	自分の中の蓄積に気づいた	10	27.0
	本が成長のきっかけになったことが分かった	5	13.5
	自分の好み、関心が分かった	4	10.8
	過去の自分と今の自分をつなげることができた	2	5.4
	<i>overall</i>		21
文学への関心が増えた		5	13.5
懐かしさが湧いた		3	8.1
世界への関心が増えた		3	8.1
他者の苦しみを理解できた		3	8.1
文学の治療効果が分かった		1	2.7
その他		1	2.7
	総数	37	100.0

全体として、「自己理解の促進」に関する回答が多い（21件）。なかでも「自分の中の蓄積」を肯定的にふり返る回答が最も多い（10件）。「この機会に今に至るまでを振り返ってみたが、この本との出会いは私の人生の転換点であったように思える」（『ノーゲームノーライフ 2』）；「様々な作品を通して目に見える大きな変化はなくとも、何かしら意識として自分の中に蓄積されているということを感じられた。作品で感動に触れることで自身を見つめ直す機会になると思う」（『氷菓』）。文学的感動が今の自分により意味での蓄積を残しているという自己理解は、文学的感動の肯定的意味づけとして捉えられる。「自分の文学の好み」に関する気づきもあった（3件）：「ある人物の人生を一緒にたどっていくような小説や映画が好きなのかもしれない。また、物悲しさがやや残るような作品に心を打たれるのかもしれない」（『死者の軍隊の将軍』）；「だいたい自分の感動する作品のパターンとジャンルが分かりやすかった。[...] 今も変わらないのはさまざまな作品に触れてこなかったからなのかと感じている」（『僕は君に10年分の『 』を伝えたい』）。文学的感動のふり返りが自分の文学的好みの気づきを促すとすれば、自己認識という観点からも文学教育という観点からも意義深い作業と言えるだろう。「過去の自分と今の自分をつなげることができた」という過去の読み方と今の読み方を対比する回答（2

件)には、かつてとは違う読み方ができることの気づきが認められる。「この本を読んだ時、自分はこう思っていた、こんなことで悩んでいた、と自分の状況を思い出した。この作品の魅力は、読んだ時の自分の状況によって感情移入できる人物が変わってくることだと思うので、今の自分はどの人に感情移入できるか確かめたいと思った」(『チア男子!』);「読みかえすと、前とは違った感動を得られると改めて感じた。[...] 高2の自分と今の自分で感想を共有してみたいと思った。そうすれば感動とは何か、少しだけ分かる気がする」(『かがみの孤城』)。逆に、「その他」として「どこに感動したのか分からない」という回答も1件ある:「この作品で感動を覚えたことは確かだが、何がどうして感動的なのかうまく説明できていないので、自分の勝手な解釈で感動したのだろうかとも思った。つまり、内容よりもそれを読んだときの状況や内面の影響が大きかったのかもしれないと思った」(『過古』)。これらの回答はいずれも、かつての感動を多かれ少なかれ客観化し、それとの距離を自覚している。これは作品の再読・再解釈の誘因となりうる要素であり、読書の充実という観点から重要だろう。

「読書の意義/文学への関心」に関わる回答も5件ある。「過去についてゆっくり振り返ってみて、読書が私たちに与える影響は思っていた以上に大きいものなのだな、と思った。読書で知識を得ることができる以外にも私たちの生き方に少し影響が及ぼされる、と考えると、読書をすることは人生において大事だな、と改めて感じた。中学生の頃までは本を読む習慣があったが、高校に入ってからあまり読まなくなったので、これを機に読書習慣を復活させたいな、と思った」(『そして、バトンは渡された』)。受験勉強や部活動が忙しくなる中高校時代に読書習慣が途切れてしまう傾向が見られるので、大学入学とともにその再開を動機づけることが重要だろう。またその際、思春期向け文学(youth literature)からより大人向け文学(adult literature)への移行を促すことも、文学教育の観点からは必要と思われる。

「懐かしさが湧いた」に関わる回答もある(3件)。「当時はもっと思うことがあったと思いますが、最近ほとんど読んでいなくて、感動も忘れていたが、振り返ってみて、当時考えた事や感じた事を少し思い出せた気がした」(『よだかの星』)。

全体として、自身の文学的感動をふり返る作業によって、自身への理解が深まり、読書の意義が実感され、文学への関心が再活性化されるという結果が認められた。

4 総合考察

本調査はパイロット的性質のものであり、調査結果がどの程度の一般妥当性を持つかについては慎重でなければならない。今後、調査規模の拡大や質問の明確化などを経た補強調査が必要になるだろう。だが、本調査の分析結果とその考察は、今後の研究のための一定の仮説ないし前提としての有効性を持つだろう。

4.1 文学的感動と実生活の感動が与える影響の比較

本研究では、文学的感動が実生活の感動と同様、直後に人間に何らかの影響を及ぼすだけでなく、その後も持続的に影響を及ぼすことが示された。それでは、文学的感動の影響と実

生活の感動の影響の内容には、どのような類似点と相違点が見られるだろうか。

実生活の感動が与える直後の影響としては、他人への接近・援助意識が指摘されてきた (Cova & Deonna, 2014 ; Zickfeld et al., 2018)。文学的感動が与える直後の影響にも、他者との関係性の向上が見られており、共通点と言えよう。ただし、実生活の感動の直後の影響についての先行研究はまだ少ないため、ここでは持続的感動に注目して比較を行う。

持続的な影響について言えば、実生活の感動の場合、他者志向・自他共存意識 (楠本他, 2004 ; 戸梶, 2004 ; 趙, 2021)、自己向上・肯定 (畑下他, 2012 ; 佐伯他, 2006 ; 戸梶, 2004 ; 趙, 2021)、認知的枠組みの更新 (Cova & Deonna, 2014 ; 戸梶, 2004)、人生の統制不能感 (趙, 2021 ; 趙・藤, 2019) が知られている。一方、文学的感動の場合、周囲への愛や自己成長・前向きさなどの影響が今回の調査で指摘された。両者は、自他意識の変容という点で共通性を示す。また、文学的感動の影響で「ネガティブになった」という回答があったが、実生活の感動の影響についても人生の統制不能感が知られており、一定の類似性を示している。

次に、文学的感動で挙げられた「価値観が多様になった」という影響に注目したい。これは実生活の感動における「認知的枠組みの更新」に似ている。だが、文学的感動はより多様な価値観を読者に提示しうるのではないかと筆者らは推測する。虚構の作品世界は、日常と非日常の両方を描くことで、実生活における以上に多様な価値観を提示することができる。それらの価値観との対話的読書を通じて、読者は価値観の多様化を自覚するのではないだろうか。バフチンのいう小説の対話性やポリフォニー性は、文学的感動による価値観の多様化という影響の根拠として捉えることができる。

以上の類似した影響以外に、文学的感動に独自の影響も確認された。日常のありがたさの認識、死への関心の増大、文学への関心の増大である。感動した作品のプロットに非日常的な設定が多いため、逆に日常のありがたさを認識させ、死への関心も増大させるのだと考えられる。

4.2 文学的感動をふり返ることの効用

前述のように、ワークシートの「その作品を読んで感動した後に、あなたに何か変化が起きましたか」、「それらの変化は、いまのあなたに影響を及ぼしていますか。あれば、どんな影響ですか」、「過去の感動的な作品と当時の自分をふり返って、あなたはどんなことを思いましたか」に対して、質量ともに積極的な回答が多かった。かつての文学的感動が今の自分に与えた変化と成長を肯定的に評価したいという気持が、全体に強く表れている。自分自身の成長は若者にとってもっとも重要なテーマの一つであり、本調査はそれを確認できるよい機会と受け止められたのだろう。それに関連して、中高校時代に中断した読書習慣を取り戻したいという回答も一定数あった。

ここから言えるのは、かつての文学的感動について想起させ、言語化させる作業の教育的効用である。一つは自分の思春期・青年期の成長をふり返る自省の動機づけとなること、もう一つは文学を読むことの意義を再認識させることが主たる効用だが、言語表現への関心の育成、自分

の文学的好みの認識といった効用も重要である。

作品のどの要素に感動したのか、作品によってどのような影響を受けたかなど、調査に回答することで初めて意識化されたケースも少なくないだろう。言いかえれば、調査そのものが調査対象を変化させる契機があることになり、調査結果の厳密性について今後さらに考察する必要がある。他方、文学教育という観点からは、この種の調査の教育的効用が確認されたいと言えるだろう。

このことは、文学的感動を越えて自伝的記憶の性質について考える論点にもなり得る。つまり、文学的感動を意識的に想起することで、感動の影響が活性化・深化し、自伝的記憶の方向付け機能がさらに強まるという可能性である。本調査の回答例はその可能性をある程度支持するものであった。

5 まとめと展望

本調査では、文学的感動がその直後だけでなく、長期的・持続的影響を持つ傾向が一定程度確認された。これは、1.1 で紹介した文学作品の変革的 (transformative) 機能に関する議論を支持する結果である。今後の研究でより調査と分析を重ねることが必要だろう。

今後の課題としては、今回の調査対象には人文学を専攻する大学院生と他分野 (理工系、教育系など) の学部1年生が入っていたため、両者の間で文学的感動の影響に質的違いがあったかを再検討する必要があるだろう。今後はデータ数をより多くし、文学との接触度合いにより研究対象を分けて、より詳細な結果を得ることが望ましい。また、今回の結果では、感動直後の影響と持続的影響の間に共通点が多く認められた。その原因としては、文学的感動による直後の影響がそのまま持続した可能性がある一方で、回想式調査であるため、回答者は記憶した直後と持続的な影響を混同した可能性もある。これに対しては、縦断的な調査、たとえば作品を読んだ直後と1か月後、2か月後にそれぞれ測定して比較することが望ましいだろう。

以上のような課題はあれ、文学感動の喚起要因と影響を、実生活の感動との対比において実証的に研究することは「文学は何のためにあるか」(Fialho, 2019) という根本的問いに答えるための一つの道筋であると思われる。

個人および社会にとっての多様な価値観をもつことの重要性については、異文化交流論やダイバーシティ論で多くの蓄積があるが、筆者らがふだん学生の相談を受ける中でも実感するところである。強すぎる道徳観と高すぎる理想、「正しいか正しくないか」しかない白黒思考、「自分はこうすべきで、社会はこうあるべき」という決めつけによって苦しむ青年は多い。実生活の経験がまだ少ないため、価値観が単一になりがちなのだと思う。文学作品を読むことで様々な人生や価値観を仮想体験し、これまで無関心だったり見下したりした他人の人生や価値観を知り、感動を含む様々な感情を伴って理解することで、多様な価値観の形成につながることを期待される。さらに文学作品は読むスピードを調整でき、くり返し読むことも可能なので、感動が実生活より長く持続し、その影響もより強く定着するのだと考えられる。

引用文献

- Bakhtin, M. (1981). *The Dialogic Imagination: Four Essays*. Edited by M. Holquist. Translated by C. Emerson and M. Holquist. Austin: University of Texas Press.
- Bakhtin, M. (1984). *Problems of Dostoevsky's Poetics*. Edited and translated by C. Emerson. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Brewer, W. F. (1986). What is autobiographical memory? In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory* (pp. 25–49). Cambridge: Cambridge University Press.
- Cova, F., & Deonna, J. (2014). Being moved. *Philosophical Studies*, 169, 447–466.
- Djickic, M., Oatley, K., Zoeterman, S., & Peterson, B. (2009). On Being Moved by Art: How Reading Fiction Transforms the Self. *Creativity Research Journal*, 21(1), 24–29.
- Fialho, O. (2019). What is literature for? The role of transformative reading. *Cogent Arts & Humanities* (2019), 6: 1692532.
- Fialho, O., Zyngier, S., & Miall, D. (2011). Interpretation and Experience: Two Pedagogical Interventions Observed. *English in Education*, 40(3), 236–253.
- 畑下真里奈・瀬戸美奈子 (2012) . 大学生における感動体験が自己効力感に及ぼす効果 総合福祉研究科学, 3, 97–104.
- 速水敏彦・陳恵貞 (1993) . 動機づけ機能としての自伝的記憶—感動体験の分析から— 名古屋大学教育学部紀要, 40, 89–98.
- Jakobson, R. (1990). *On Language*. Edited by L. R. Waugh and M. Monville-Burston. Cambridge and London: Harvard University Press.
- 神谷俊次 (2002) . 感情とエピソード記憶 高橋雅延・谷口高士 (編) 感情と心理学 (pp. 100–121) 北大路書房
- Koopman, E. M., & Hakemulder, F. (2015). Effects of Literature on Empathy and Self-Reflection: A Theoretical-Empirical Framework. *Journal of Literary Theory*, 9(1), 79–111.
- Kuiken, D., Miall, D., & Sikora, S. (2004). Forms of Self-Implication in Literary Reading. *Poetics Today*, 25(2), 171–203.
- 楠本恭子・長ヶ原誠 (2004) . 大学生の「感動」に影響を及ぼす要因に関する質的・量的研究 神戸大学発達科学部研究紀要, 11(2), 279–288.
- Landmann, H., Cova, F., & Hess, U. (2019). Being moved by meaningfulness: Appraisals of surpassing internal standards elicit being moved by relationships and achievements, *Cognition and Emotion*, 33, 1387–1409.
- Menninghaus, W., Wagner, V., Hanich, J., Wassiliwizky, E., Kuehnast, M., & Jacobsen, T. (2015). Towards a psychological construct of being moved. *PLOS One*, 10, 1–33.
- Miall D. (2006). *Literary Reading: Empirical & Theoretical Studies*. N. Y.: Peter Lang.
- Miall, D., & Kuiken, D. (1994). Foregrounding, defamiliarization, and affect: Response to literary stories. *Poetics*, 22, 389–407.

- Miall, D. S., & Kuiken, D. (2002). A feeling for fiction: Becoming what we behold. *Poetics*, 30, 221–241.
- 野中進・趙丹寧 (2023) . 若者はどのように文学に感動するか—日本人大学生の文学的感動の喚起要因と反応についての探索的研究 (I) 埼玉大学紀要 (教養学部), 59(1), 113–128.
- Pillemer, D.B. (2003). Directive functions of autobiographical memory: The guiding power of the specific episode. *Memory*, 11, 193–202.
- 佐伯怜香・新名康平・服部恭子・三浦佳世 (2006) . 児童期の感動体験が自己効力感・自己肯定意識に及ぼす効果 九州大学心理研究, 7, 181–192.
- 佐々木智美・皆川直凡 (2013) . 大学生・大学院生が想起する感動体験の特徴の分析—自伝的記憶としての感動体験— 鳴門教育大学情報教育ジャーナル, 10, 21–28
- 佐藤浩一 (2008) . 自伝的記憶の機能 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (編) 自伝的記憶の心理学 (pp. 60–75) 北大路書房
- 澤口右京 (2012) . 大学生の感動体験と精神的健康、心理的 well-being の関係：共分散構造分析による因果モデルの検討, *Journal of the Japanese Society of Health and Behavior Sciences*, 11, 1–9.
- Tan, E. S. H. (2009). Being moved. In D. Sander & K. R. Scherer (Eds.), *Oxford Companion to emotion and the affective sciences, series in affective science* (p. 74). Oxford: Oxford University Press.
- 戸梶亜紀彦 (2004) . 「感動」体験の効果について—一人が変化するメカニズム— 広島大学マネジメント研究, 4, 27–37.
- 戸梶亜紀彦 (2010) . 感動と心理の変容 海保博之・松原望 (監) 感情と思考の科学事典 (pp. 290–291) 朝倉書店
- Shklovsky, V. (1990). *Theory of Prose*. Translated by B. Sher. Normal: Dalkey Archive Press.
- Van Schooten, E., Oostdam, R., & de Glopper, K. (2001). Dimensions and Predictors of Literary Response. *Journal of Literacy Research*, 33(1), 1–32.
- 趙丹寧 (2021) . 自伝的記憶としての感動体験と体験後の変化に関する探索的検討 埼玉大学紀要 (教養学部), 57(1), 1–17.
- 趙丹寧・藤桂 (2019) . 感動体験がもたらす直後および長期的な影響の文化差：今日の自信を取り戻す日本人，明日の愛を取り戻す中国人 日本心理学会第 83 回大会発表論文集, 747.
- Zickfeld, J. H., Schubert, T. W., Seibt, B., Blomster, J. K., Arriaga, P., Basabe, N., ... Fiske, A. P. (2018). Kama muta: Conceptualizing and measuring the experience often labelled being moved across 19 nations and 15 languages. *Emotion*, 19, 402–424.
- Zyngier, S., & Fialho, O. (2010). Pedagogical stylistics, literary awareness and empowerment: a critical perspective. *Language and Literature*, 19(1), 13–33.